隊員と家族をつなぐ　家族会ほっとライン

パリ五輪を振り返って

パリオリンピック２０２４大会（パリ五輪）は、7月26日から8月11日までの17日間にわたり開催されました。前回の東京オリンピック以降、自衛隊体育学校は「つかめ、世界の頂点！」を合言葉に、選手たちの育成に力を入れ、日々の練習を重ねてきました。

その成果として、5種目に7人の選手を送り出し、銀メダル3個を獲得することができました。これは、前回の東京オリンピックでの5個、ロサンゼルスオリンピックやロンドンオリンピックでの4個に次ぐメダル数となります。

各選手の活躍については、次の通りです。

○レスリング：高谷大地1等陸尉（フリースタイル74kg級）第2位

○柔　道：新添左季2等陸尉（混合団体）準々決勝、準決勝に出場し第2位。女子70kg級では第7位

○近代五種：佐藤大宗2等海曹（男子個人）第2位（五輪大会での日本人初、海上自衛官初のメダル獲得）

○レスリング：石黒隼士2等陸曹（フリースタイル86kg級）第7位入賞

○水　泳：蝦名愛梨2等陸曹（女子マラソンスイミング10km）第13位

○近代五種：内田美咲3等陸曹（女子個人）第23位

○女子ラグビー：梶木真凜3等陸曹（7人制ラグビー）チームで17トライ中5トライを決め第9位（過去最高位）

これらの成果は、選手の努力だけでなく、各競技団体や高校・大学の指導者、ご家族、そして自衛隊体育学校にサポートをいただいた関係者の皆さまのご支援によるものです。

特に、自衛隊体育学校の練習環境の整備や施設の充実、業務を支える各幕僚監部や関係各部隊の協力があったからこそ、このような成果を上げることができました。

また、日頃から自衛隊体育学校を支援してくださる協力団体や防衛省・自衛隊関係者の皆さまにも、心から感謝申し上げます。本紙をお借りして、皆さまに感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。

さて、今回は自衛隊体育学校第2教育課長として、第2教育課の役割や、パリ五輪前後の選手サポートについてお話しさせていただきます。

自衛隊体育学校第2教育課には、11の種目班（レスリング、ボクシング、柔道、射撃、ウェイトリフティング、アーチェリー、陸上、水泳、近代五種、カヌー、女子ラグビー）があり、それぞれの班が国際大会でのメダル獲得を目指して日々練習に励んでいます。

パリ五輪では、5つの種目で7人の選手が出場しましたが、出場決定時期は選手ごとに異なります。

早い段階で五輪出場が決まった選手もいれば、直前になってから決定した選手もいました。

自衛隊体育学校では、各選手の状況に応じて、校内練習だけでなく、他の強豪チームとの合同練習や出稽古を積極的に行い、選手が最高のパフォーマンスを発揮できるようサポートしています。

さらに、出場が決まった選手や最終選考を迎える選手には、スポーツトレーナーやメディカルトレーナーによる優先的なサポートを提供。選手が万全のコンディションで日々の練習に取り組めるように配慮しています。

また、自衛隊体育学校の特徴として、11の種別班の選手たちは朝霞駐屯地を拠点に、それぞれの競技に集中して練習していますが、食事の時間や日常生活で他の競技の選手との交流もあります。

このように、選手たちは自分の競技だけでなく、他競技の選手とも切磋琢磨しています。この環境が、選手たちにとって非常に良い影響を与えていると感じています。

パリ五輪から帰還した選手たちが、種別班を超えてお互いに健闘を称え、励まし合っている光景は、非常に印象的でした。

最後に、自衛官アスリートの活躍の意義を再認識し、今回の結果に満足することなく、今後も皆さまのご期待に応えられるよう、引き続き自衛隊体育学校一同、全力を尽くしてまいります。変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

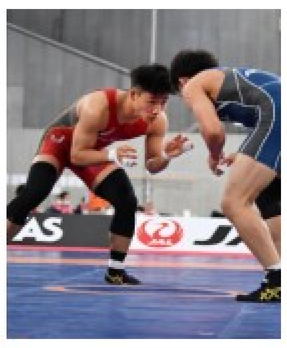
（自衛隊体育学校第2教育課長　2等陸佐　正田　準緒）

◇1等陸尉　高谷　大地◇

オリンピックに向け、トレーニング理論、栄養学などさまざまなことに取り組み、レスリングだけではなく、多くの知識が必要だと感じました。

その取り組む段階では、コーチ、トレーナー、家族などの支援を受け、一人ではここまで至ることはできませんでした。

オリンピックを目指す過程だけではなく、今後の人生においても何事も自分一人でできず、誰かの力を借りないといけないという感謝の気持ちを持つことが、必要だということを念頭に置き、私が関わる皆さまに還元（恩返し）ができるよう精進していきます。

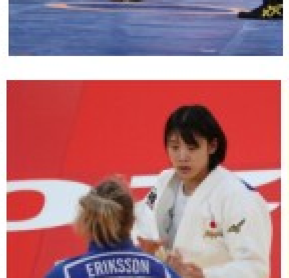


2等陸尉　新添　左季

パリ五輪は、私にとって悲喜こもごもなものとなりました。五輪1年前に代表内定をいただいてから、金メダルを目指して準備してきましたが、個人戦では、自分が思ったような成果を上げることができませんでした。

情けない気持ちでいっぱいでしたが、なんとしても団体戦ではメダルを持ち帰りたいという一心で戦い、銀メダル獲得に貢献ができました。

帰国後、自衛隊の方々が温かく迎えてくれて、安堵したと同時に自衛官アスリートとして戦えたことを誇りに思いました。

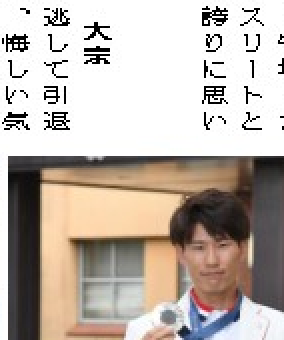


2等海曹　佐藤　大宗

東京五輪出場を逃して引退する予定でしたが、悔しい気持ちが自分を動かし、パリ五輪に出場するだけではなく、日本人初のメダルを獲得するという目標に対して、死ぬ気で練習に取り組みました。

その中で自衛隊体育学校、近代五種班の監督、コーチ、家族のサポートと皆さんの熱い応援が、私を最後まで動かしてくれる原動力に変わり、メダル獲得につながりました。

皆さま一人一人に心から感謝しております。ありがとうございました。



福島市
（福島県）

福島市出身隊員を激励　松島基地訪問
ブルーインパルスの曲技飛行を間近で見学

ＢＩをバックに記念撮影

福島市自衛隊家族会（児玉進市会長）は、10月24日と25日の両日、昨年に続いて1泊2日の研修旅行を実施しました。

この研修旅行は、福島市出身の隊員が勤務する陸・海・空それぞれの自衛隊の部隊を訪問し、遠方で活躍する隊員を励ますとともに、訓練の実態を学んで、参加者同士の親睦を深めることを目的としています。

今回の訪問先には多くの会員が希望していた航空自衛隊松島基地が選ばれました。

昨年から見学希望を提出し調整をしてきたものの、松島基地は「ブルーインパルス」のベースキャンプとして人気が高く、見学機会や人数に制限があるため、今年になってようやく実現しました。

今回の研修には34人が応募し、当基地に勤務する隊員の家族2組も同行しました。また、福島市出身の基地勤務隊員6人を激励する機会も得られました。

児玉会長は「長年のご苦労に感謝するとともに、福島市出身の隊員として誇りを持ち、ますます元気に活躍してほしい」と励ましの言葉をかけ、郷土の近況を記した資料などを贈呈しました。

当日は晴れ渡る秋空の下、待望の「ブルーインパルス」の曲技飛行訓練を間近で見学することができ、迫力あるジェット音が響き渡る中、見事な曲技飛行が披露される様子に参加者全員が歓声を上げ、心ゆくまで楽しみました。

さらに、現役のパイロットから訓練の解説をいただき、航空自衛隊の精強さを実感し、研修の目的を十二分に達成する充実した内容となりました。

（福島市自衛隊家族会　事務局長　後藤　杏行）

兵庫県

兵庫県の家族支援協定が完了
家族会と隊友会、5駐屯地と協力体制構築

10月16日、兵庫県自衛隊家族会（高木清志会長）と兵庫県隊友会（小川祥一会長）は、陸上自衛隊伊丹駐屯地にて行われた「家族支援活動協定書締結式」に参加しました。

この式は、伊丹駐屯地（司令・相園和宏陸将補）および川西駐屯地（司令・内藤智子陸将補）の合同で行われ、関係者や会員が出席し、協力体制が確認されました。

伊丹駐屯地の業務隊長増田健吾1等陸佐や両駐屯地の厚生科長、厚生班長に加え、自衛隊家族会からは高木会長、佐阪隆監事（西神戸会長）、村岡正幸理事（川西猪名川会長）、高橋三津子理事（宝塚会長）が、隊友会からは小川会長と小林事務局長が参加しました。

佐阪監事は、兵庫県下の他の駐屯地での締結式にも全面的に協力され、兵庫県自衛隊家族会の旗の準備や写真撮影に尽力されました。

これにより、兵庫県内の5駐屯地と兵庫地方協力本部を含む全8者での協定締結が完了し、今後は具体的な活動体制の構築が進められることになります。

前列左から高木会長、相園司令、内藤司令、小川会長

式後、相園司令、内藤司令、増田隊長、平野厚生科長、隊友会の小川会長、小林事務局長、そして私の計7人でブリーフィングを行い、来年1月13日から17日の間、実施予定の「中部方面隊災害対処実働演習　南海レスキュー」への家族会と隊友会の参画について意見交換をしました。

今回の締結に至るまでの道のりは長く、兵庫県隊友会との協力関係を深めながら進めてきました。

今後は「家族支援活動マニュアル」を整備し、訓練を通じて支援体制の強化を図ってまいります。

（兵庫県自衛隊家族会　会長　高木　清志）

家族会長等奮戦記　91

道南自衛隊家族会
会長　杉本　幹雄

隊員と家族をつなぐ
道南自衛隊家族会の現状と取り組み

はじめに

私は平成19年に函館市自衛隊父兄会に入会し、22年から事務局長、29年から道南自衛隊家族会の会長を務めています。長年にわたり、道南地域の自衛隊員とそのご家族を支え、会員同士の交流促進や地域への理解を深めるために活動を続けています。

道南地域と自衛隊の役割

道南地域は北海道南西部に位置し、函館市や北斗市などの主要な市町村を含む広範囲にわたりますが、人口減少が続いていることが課題です。この地域には自衛隊函館地方協力本部、陸上自衛隊函館駐屯地、海上自衛隊函館基地隊、航空自衛隊八雲分屯基地が配置され、災害対策や防衛において大変重要な役割を果たしています。

これらの部隊と地域住民の連携を深めることが、地域の安全と防衛力の維持にとって欠かせない要素となっています。

道南自衛隊家族会の活動と支援体制

道南自衛隊家族会は、渡島総合振興局および檜山振興局内の18の市町村をカバーし、現在15の地区会で構成されています。

活動会員は約450人で、各地区会が独自に交流や支援活動を展開しています。地域ごとに異なる活動内容に加え、各地区会の60％は自治体に事務局を置き、残りの40％は地区会が運営しています。自治体の支援を受けられる地区会は比較的活動を円滑に行えていますが、支援を受けていない地区会は会員による運営に依存しており、活動の負担が重くなっています。

道南自衛隊家族会としても、事務局を家族会自らが運営するよう働きかけてきましたが、自治体の支援なしに維持するには課題が多く、今も地域と密接に連携しながら活動しています。

毎年1回の総会や3回の理事会を通じて、家族会全体の活動方針や行事計画を共有しており、また、各地区会も年1回の総会や必要に応じた理事会を開催して、連絡体制の強化を図っています。

道南自衛隊家族会の重要な取り組み

家族会の重要な活動の一つとして、新入隊者の家族支援と勧誘活動があります。特に春の入隊予定者激励会では、若い世代の家族に家族会の役割を伝え、新会員の加入促進を図っています。「鉄は熱いうちに打て」という言葉の通り、入隊直前のご家族に家族会の活動を知っていただくことで、会員の若返りと増加につなげています。

道南自衛隊家族会が直面する課題

道南自衛隊家族会も、他の地域団体と同様に会員の高齢化や減少という課題に直面しています。特に自治体から支援を受けられない地区会においては、家族会活動の継続が難しくなってきています。

さらに、少子化の影響で自衛隊入隊者数も減少しており、この問題は地域の防衛力にも影響を及ぼしかねません。こうした状況下で若い会員の確保と勧誘がますます重要となっています。

また、近年は異常気象による災害の増加が見られ、災害時における家族会の役割もますます重要になっています。道南家族会では、春と夏の異動期に合わせて「家族支援通知」を作成し、各部隊や関係団体に配布しています。

これにより、部隊や家族会間で意見交換を行い、災害時の迅速な対応に備えていますが、会員数の減少と高齢化により、このような活動の維持が難しくなっているのが現状です。

地域との連携強化

家族会の活動には、地域社会との協力が不可欠です。各地区会が自治体と連携することで、北方領土返還運動に伴う署名活動や家族支援事業がスムーズに進められています。

しかし、自治体から支援を受けられない地区会は、会員のボランティア精神に依存しているため、活動が限定されることが課題です。

今後も地域社会との連携体制を強化し、活動の継続を図っていく必要があります。

結び

道南自衛隊家族会は「隊員と家族をつなぐ」ことを理念に、地域防衛や災害対応に対する支援に努めています。微力ながらも、地域の皆さまと共に、これからも自衛隊とその家族を支え、信頼される家族会を目指して努力を続けてまいります。

青森市
青森県

砕氷艦「しらせ」、青森市民が盛大に歓迎
家族会女性部員が伝統の流し踊りを披露

家族会女性部会員が流し踊りを披露

10月13日、青森県自衛隊家族会（野呂和生会長）および青森市自衛隊家族会（成田光男会長）は、19年ぶりに青森港に寄港した2代目砕氷艦「しらせ」の歓迎行事を行いました。この「しらせ」の青森入港は、2005年9月に寄港した初代「しらせ」以来です。

佐藤２曹にサインを求める市民の長蛇の列

午前11時からの歓迎行事では、青森市自衛隊家族会女性部の会員が「ねぶた節」に合わせて流し踊りを披露。

午後1時からは、「しらせ」の一般公開が始まり、たくさんの市民が訪れました。特に、船体後方のヘリコプター格納庫では、南極の石や数万年前にできたという南極の氷を見学する人々の姿がありました。

青森地方協力本部が開設した募集コーナーでは、青森市出身のパリオリンピック銀メダリスト、佐藤大宗2等海曹が登場。彼にサインを求める市民の長蛇の列ができ、大いに賑わいました。

募集コーナーでは、高等工科学校の授業風景や部活動、野外訓練などをパネルで展示し、市民へのPRが行われました。特に教育内容についての質問が多く、来場者はその充実ぶりに感心していました。

「しらせ」の艦長、齋藤一城1等海佐は「初代『しらせ』から19年ぶりの青森港寄港を乗員一同楽しみにしていました。短い日程ですが、青森の伝統と文化を存分に楽しみたいと思います」と、歓迎行事に対する感謝の言葉を述べました。

そして、10月14日午後4時頃、「しらせ」は多くの青森市民に見送られ、次の訓練地に向けて青森港を離岸しました。

（青森県自衛隊家族会　会長　野呂　和生）

横須賀
（神奈川県）

横須賀地区殉職隊員追悼式
御霊とご遺族に祈りを捧げて

慰霊碑「英魂照海生氣集」

10月22日、海上自衛隊横須賀基地にて、横須賀地区殉職隊員追悼式が行われました。ご遺族、横須賀地区の各級指揮官、先任伍長、多数の来賓や関係団体の方々が参列し、御霊のご冥福とご遺族のご健勝を祈りました。

神奈川県自衛隊家族会からは中條祐介会長と西村三浦半島地区会長が参列し、共に祈りを捧げました。

追悼式は、昭和46年に建立された慰霊碑「英魂照海生氣集」（えいこんらうみをてらしせいきあつまる）に見守られながら、国歌斉唱から始まりました。

続いて、執行者の真殿知彦横須賀地方総監によって、２０３柱の霊名簿が奉安され、拝礼と黙とう、総監の追悼の辞、参列者による献花、追悼電報の拝読、弔銃発射と厳かな儀式が続きました。最後に再び霊名簿の降納が行われ、式はご遺族代表のあいさつをもって閉会となりました。

かけがえのないご家族を失われたご遺族の深い悲しみに触れると、胸が痛みます。安全保障環境が厳しさを増す中、私たちは国の平和と安定を願い、ご遺族の安寧と末永いご健勝、そして御霊が安らかであることを心よりお祈り申し上げます。

（神奈川県自衛隊家族会　会長　中條　祐介）

入　間
（埼玉県）

2年ぶりの入間航空祭　25万人が集結
有志が地本の広報活動をサポート

来場者とサイポンとの記念撮影をお手伝い

11月3日、航空自衛隊入間基地（司令・佐藤網夫空将補）で、2年ぶりとなる入間航空祭が開催されました。

基地周辺に住む自衛隊家族会の有志3人は、飛行場地区の入り口に設置された埼玉地方協力本部の広報ブースでその活動をサポートしました。

前日の激しい雨が一転して当日は快晴で絶好の航空祭日和となり、午前8時の開門と同時に、予想以上の多くの観客が続々と来場。

飛行場地区では、自衛隊の各種航空機や装備品の地上展示に加え、C-1などの飛行展示が行われました。また、中空音楽隊の演奏や警備犬の訓練展示も別会場で実施され、来場者を楽しませていました。

家族会の参加者は、広報ブース前で観客に声をかけ、興味を持ちそうな方々を地本のブースに誘導したり、自衛隊の制服を試着して写真を撮る家族連れを手伝ったりしました。

この活動は、地本の広報活動を側面からサポートする役割を果たしますが、ブース前を往来する来場者は桁違いに多く、その賑わいに圧倒されることもありました。

それでも家族会の赤いビブスを着て活動していると、さまざまな方々と交流する機会が増えて、逆に元気をいただくこともあり、こうした小さな草の根活動でも、続けることが大切だと改めて感じました。

午後からは、入間基地で実に5年ぶりとなるブルーインパルスの曲技飛行が行われ、観客は素晴らしい飛行に魅了され、盛んな拍手を送っていました。

（埼玉県自衛隊家族会　会員　小澤　和仁）

編集後記

▽今年も残すところわずかとなりました。振り返ると、自衛隊選手たちがパリ五輪で見せた素晴らしい活躍が思い起こされます。▽５面と８面で各地でのメダリストたちの奮闘ぶりを紹介しています。▽また８面では自衛隊体育学校での訓練風景とともに３人の選手がトレーニングや競技に対する思いを語ってくれました。ぜひご一読ください。